

さいたまここに人あり

学校、家庭、もう一つの居場所 『貧困』可視化したアスポートの9年



彩の国
子ども・若者支援ネットワーク
しょうぞう
土屋匠宇三さん

プロフィール 埼玉大学で教育学を専攻。学生時代からアスポート教育支援事業でボランティアをし、現在は一般社団法人 彩の国 子ども・若者支援ネットワークの職員。近年は、その活躍が新聞やテレビでも紹介された。

宿題よりも家事

私は学校が苦手で、小学生のころから「なんかうまくいかないな」と感じていました。

6人兄弟でシングルマザー世帯であり、裕福とは言えない家庭で育ちました。母は働きに出っていたので、家事分担は6人全員でやるわけです。下の子の面倒をみる係、洗濯をする係、ご飯をつくる係、男でも女でも家事は重要だと考えて生活していました。

そこが学校文化と合わなかったんです。学校では「宿題をやりなさい」と言われるけれど、家に帰ったら近所のスーパーを回って、より値段の安いお店で買

って、料理をつくってみんなで食べる。片付けは他のきょうだいの担当だったので、食後は疲れているし、娯楽もほしいからマンガを読んだりしていました。私にとつて、宿題よりも、家事のほうが重要だったわけです。

一般的には宿題をやらないのは悪いこととだけ、私は誇りを持って「宿題をやらない宣言」をしていました。その当時、学校の先生はそれに対して言うことは言わなきゃいけないから、学校はやっぱり苦手でした。でも、「嫌だな」という記憶しかないのです、先生たちも私の家庭環境をわかったうえで、声かけをしていたんだと思います。私は先生を好きだと思つたことはないんですが、まわりの大人たちは「あんたはいい先生に恵まれた」と言うんです。いま思えば、私の可能性を伸ばすために、いろんな働きかけをしてくれていたんだと思います。

地域の子ども会が 救い

私には家庭と学校と、もうひとつの

フィールドがありました。「子ども会」といって、埼玉大学の学生さんたちが土曜日に遊んでくれたんです。浦和（現さいたま市）には学童保育がなかったのですが、地域で「浦和に学童保育をつくらう」という学童保育運動がはじまりました。まずは実践を、ということでした。まずはお話をしよう」と活動していた埼玉大学の児文研（児童文学研究会）の学生に声をかけて、地域の子どもたちを集めて遊んでいました。

週に1回だけだけど、私にとつてはとても救いだったんです。そこが私のアイデンティティであつて、学校と家だけに閉じ込められていたら、全然違つていたと思います。子ども会ではみんなが主役になれたり、自分の居場所や存在を肯定してくれるひとがいたので、学校で嫌なことがあつても「どうでもいいや」と思えたんです。いま、アスポルトでやっていることも、変わりはないかもしれませぬ。（アスポルトでも）子どもにとつて居心地のいい場所を、保障しなきゃいけないという思いはありますね。

子ども会はそのすぐ好きで、普通は小学校を卒業するとみんな来なくなるんですけど、中学校、高校生になつてもずつ

と参加していました。年齢が上がつていくと、今度は子どもたちの面倒をみる側になるんです。

高校を卒業して働いていた時期もあったんですが、その間も子ども会には参加して、子どもたちと遊んだり、保護者会に参加して保護者と話したりしているなかで、「教育ってなんだろう」と疑問が出てきました。子ども会に参加する家庭の層も、昔とは違って、比較的余裕のある家庭が、塾だけでない体験をしたいと、学生さんたちが面倒をみてくれてリーダーシップを学べる場として入ってくるんです。私立の中学校に行く子どもも多かったです。

一方で、保護者会をひらいても参加しない家庭もいました。どうも、それが貧困層に多そうだと感じていました。年会費は3000円くらいですけど、払えず来なくなつたり。でも困難な家庭の子でも、ずっと居つづける子もいるんです、私みたいに。そういう子は「高校に行つてます」と嘘をついて、それがバレるとみんなから糾弾されて子どもたちとの関係も悪くなつたり、なんか変だなと感じていました。私と貧困との関わりは、そこが一番大きかったです。

大学でアスポートと出会う

そういうなかで、大学生に憧れがあった、「埼玉に行きたいな」と思って、4年遅れで入学しました。

私は商業高校出身で、受験に必要な科目はギリギリで、数学2と3は履修していない。履修をしてもほとんど0点で、それでも卒業できる高校なんです。そのなかで、なんで大学に行けたのかというと、うっとうしいと思っていた小学校、中学校で、きちんと学力保障をしてくれたことです。もうひとつは、別居していた父が予備校に通うためのお金を出してくれたんです。そういう社会関係と、経済的支援があったから、もう一回勉強し直す機会を得ることができました。

なぜ学校が苦手だったか、小中高校生のときはわからなかったのですが、教育学部に入りました。大学院の指導教員がアスポート代表理事の山口和孝先生で、研究のテーマが「アスポート教育支援」だったんです。大学院に入ったのが、201

1年の4月。アスポートができたのが、前年の9月だったので、ボランティアで川口教室に通いました。

アスポートの学習教室のなかでやっていることって、あきらかに学校教育とは違うんです。一方的なカリキュラムがあって、子どもたちをこのレベルまで引っぱり上げるといふかんじじゃなくて、すごく福祉的な視点があるということが、大学院の研究でわかりました。

学校の先生になって、たくさん子どもたちに関わることで、できることもあると思っただけで、アスポートだと、非常に困難のある子どもたちをきちんと見てあげられるというのがありました。自分が直接関わって変える方法と、自分が知ったことを外にきちんと伝えていくことで、一人の大人として責任を果たしていきたいと思いました。その現場として、アスポートが私のなかでの選択肢でした。

自立とは依存先を増やすこと

アスポートに来て、私は幸せな環境に

あったなと振り返ることができました。それに対して、アスポートの子どもたちは、親からの愛情や、経済面だったり地域環境だったり、色んなものが欠けているんですね。色んなものが保障されていないから、ポロポロと抜け落ちてしまふ。まわりの人は、気がついて補ってあげなきゃいけないんです。

小児科医の熊谷晋一郎さん（東京大学先端科学技術研究センター准教授）が「自立するって依存先を増やすことだ」と言っていました。みんな、いろんな人に頼りながら生きています。頼りながら生きていくことを認識せずに生きていけるのが、自立だと言うんです。車椅子の人が誰かに車椅子を押ししてもらっても、それが誰かに「助けられた」と認識しないのが、本当の自立だと。

いま、社会全体的に孤立感が増しているなと思いますね。「困っているよ」と言いづらくなっている。それは、学校の現場もそうですけど、社会全体に余裕がなくなっていることと関係があると思います。いまも昔と変わらず「困っている人を助きたい」という人はいっぱいいるんだけど、手を差し伸べる余裕がないのが大きいんです。

共感する人が増えなければ、子どもの貧困というワードがこんなに広がっていないです。社会全体が歪んでいて、家庭のなかでうまく教育や子への支援、自立ができていないひとが増えているような気がします。一言でいうと、生きづらい社会になっていると思います。社会全体が生きづらさに直面しているんだと思います。大学で講義をしても、みんな奨学金を抱えて、就職できるかどうかかわからない、ブラック企業に就職してしまつて職を転々とする事になれば、明日は我が身だ、という危機感のある学生さんには響きますよね。

アスポート9年 成果と課題

アスポートが始まつて9年間で、支援し高校に送り出した子どもたちが3000人。そのうち15%は不登校でした。私にとっては、大変な困難をかかえた子どもが、少なくともいまは笑つて暮らせるようになったというケースがあります。その子ひとりが笑つて暮らせるようにな

つただけでも、よかつたと思います。

貧困は親と子どもの責任だと、どの自治体の福祉課もケースワーカーも思っているんです。県が「貧困は自己責任ではない」と、政治の責任で対策に乗り出したことは、大きな成果です。いままでボランティアに頼っていたことに予算がついて、この仕事で活動していけるだけの予算がきました。いままで見えていなかった貧困を、各自治体が可視化して支援したことは、アスポート事業が生み出した以前からは前進面ですね。

今年、さいたま市の学習支援事業がNPOから株式会社トライに委託先が変更されました。いま、自治体の学習支援は、約15%が民間塾が事業受託しています。教室で「勉強のみ」「テスト成績を上げる」だけの取り組みでは、参加してくる子どもの願い、状況とは合っていない。これは効率的ではないし、手間も時間もかかるんですが、学びたいという思いを引つ張り出してあげる取り組みをしないと、困難な家庭の子どもがとりこぼされてしまうことが一番の問題です。

これからの課題は、もっと支援する人を増やすことです。ほとんど親代わりですからね。(子ども)一人に(支援員)

一人つかなきゃいけないような状況で、支援員は全然足りていません。親が親としての機能を果たしたいけど果たせていない家庭の子どもたちがいっぱいいます。昔は地域で支援していたり、私のように子ども会があったりしたんだけど、いまはそういうものを地域で組織できないわけです。そうしたら、誰がやるかという、みんなやるしかないわけです。仕事柄、学校の先生に会うことが多いんですが、みんな、子どものために一生懸命考えていて、子どものことが好きなんです。すっごい忙しいんですけど、30分、1時間も時間をとってくれて、子どものことを真剣に考えてくれる。でも、家庭の問題にまで介入できる枠組みがないんですよ、学校というのは。

子どもたちのことをなんとかしたいという気持ちでは、私たちと一致している。先生たちとはもつとお互いに大変さを分かち合えればと思つています。家庭訪問をして、子どものたちの暮らしを知つてほしいし、私たちも学校での子どもたちのようすを知りたい。学校だけでなく、一緒に大きな視点で関わってほしいなと思います。